■徳島県環境審議会環境政策部会　平成16年度第2回会議　会議録

1　日時　　平成16年12月17日（金）午後3時30分から午後5時３０分まで

2　場所　　徳島プリンスホテル

3　出席者　　委員19名中18名が出席

（1号委員：学識経験者、50音順、敬称略）

池田早苗委員、池田隆行委員、岩井博委員、樫本幸実委員、鎌田磨人委員、近藤光男委員、近藤真紀委員、竹内久委員、近森憲助委員、唐渡義伯委員、中村英雄委員、藤岡幹恭委員、藤村知己委員、松橋利江委員、森逸子委員、山根和美委員

（2号委員：市町村長又はその指名する職員、敬称略）

島田泰子委員（代理：大津愛博）、安友清委員（代理：増金賢治）

（事務局）

田村忠之環境局長ほか

4　会議次第　　⑴開会

⑵あいさつ　　田村環境局長

⑶議事　　徳島県環境教育・環境学習推進方針（仮称）のあり方について

⑷閉会

■議事概要

【事務局】

徳島県環境審議会環境政策部会を開会する。現在、本日の出席は16名（開会時）なので、当部会委員数19名の過半数を超えており、徳島県環境審議会運営規程第7条第3項の規定により、この会が有効に成立していることを報告する。

【田村環境局長】（あいさつ）

（以後は部会長が議事を進行）

（会議録の確認）

【部会長】

環境教育・環境学習推進方針のあり方について、政府が閣議決定した環境教育基本方針のミニチュア版を策定するのではなく、徳島というこの地域に役立つものを策定したいということについては、前回の部会で皆さんの了承を得たと思う。抽象的な議論をするのではなく、ある環境分野について行動するために、環境教育・学習、あるいは啓発を具体的にどうすればいいか。複数の環境分野について、それぞれに一つずつ合意をとりながら進めたい。最終的に横断的にまとめるか、分野ごとにまとめるかは議論の

過程を見て考えたいが、少なくとも議論をする段階では、ごみ問題や地球温暖化対策、自然保護など具体的な環境への取り組みについて話をしたいと思う。

本日は、どの分野を取り上げるべきか、また環境教育の方針としてまとめるならどういうことが必要かということについて自由に発言を願いたい。

委員】

例えば、各市町村で環境の監視員制度のようなものを設けて、それぞれの地区の苦情や問題点を聞くのはどうか。定期的に結果を持ち寄り、改善策や条例の強化などいろんな方法を検討し、地域が良くなるような方向に持っていくとよいのではないか。

それから、上勝町で行われている「ごみゼロ運動」を各市町村や徳島県全体で推進できればいいと思う。これも、先の監視員制度を導入してもいい。もっとも監視員がいなくても、みんなが気をつけることで推進できれば一番いいと思う。

委員】

やはり子どもの頃からいろいろ体験させることが大切だと思う。パンフレットを見たり話を聞いたりするのもよいが、身をもって体験することを大事にしたい。ビオトープを例にあげれば、何か一つモデル的なものをつくって、そこで遊んだり、水辺の生物を良く知ったり、生物に対する思いやりの意識を芽生えさせたりしながら、楽しみながら環境に接するのが一番ではないか。

それから、農業と一般の人の生活とがかなり離れてるような気がするので、体験型農業もよいと思う。昔あったように小学校で畑や田んぼを作るのもいい。

地球温暖化対策など大きな問題もあるが、一番身近に考えられるのはやはり水辺やビオトープだ。子どもの時から水辺に接して楽しみながらいろんなことを学習することが大切だ。徳島はまだ自然に恵まれているので、現在ある自然環境を含めて立派なビオトープをつくり、そこへ小学校や幼稚園の時代から遊びに行って環境を学ぶことを考えてはどうか。そうすればゴミを捨ててはいけないとか、水辺をきれいにしておかなければいけないというような意識が芽生えてくるのではないか。

いずれにしても、環境に対する意識は子どもの頃に身につけるようにしないと、大人になってからではなかなか変えられないと思う。

委員】

徳島県にはまだまだ自然が多く残されている。眉山や吉野川のように、都市近郊にも自然がかなり残っている。それを有効に活用したい。そういう自然が残っているところで、どういう環境教育ができるのか、あるいはすでに実践している小学校などを行政がどうサポートしていくのかを考える必要がある。

自然環境というのはいいことばかりではない。生き物や植物のことだけではなく、どういう危険がそこにあるかということも、ある程度知る必要がある。専門的な知識のある人を学校が上手く活用するために、その仲立ちをする人も必要だ。学校や地域を良く知っている人、植物や動物の専門家、さらにはそういう方

々をつなぐ人を養成してネットワーク化することで、学校が活用できるようにするといった環境整備を進めることが、とても大事なことでないかと思う。

それから、環境教育というとすぐ自然環境を思い浮かべるが、人間活動が自然に対して負荷を与えているという側面もある。将来、社会の中心となって働く子どもたちにとって、例えば地球温暖化の問題は自分たちの生活に直接関わってくる。自分の生活から排出されたものが地球温暖化を招いている。二酸化炭素の排出規制など、社会的、経済的な問題と自分たちの生活との関係を考えたり、環境問題を自分の生活に引きつけて考える環境教育も必要ではないか。

委員】

今の環境問題は、子どもが大きくなるまで待ってくれない。環境問題の解決は、一般の住民がどれだけ動くかにかかっていると思う。地球温暖化問題なども含めて取り上げる環境分野は総花的でもよいと思うが、解決のために住民がどれだけ動くかというところで徳島らしさが出ると思う。内容はごく普通のことであっても、活動を実践するときにどう動くのか、またそれをどう支援できるかが大事だと思う。地球温暖化問題にしてもごみ問題にしても、自然環境問題にしても、解決のためには、いろんな活動団体が、お互いにもっとよく知り合う必要がある。

私はごみ問題に取り組んでいるが、他の分野ことはあまり分からない。輪を広げていきたい。例えば生態系のことを知っている人を、私もそれなりに知っているが、活動内容までは十分に知らない。今度行う環境ボランティア交流会のようなものを拡大していけば、かなりの成果が出てくると思う。

委員】

徳島にとって大事な分野であり、徳島だから取り組める分野という視点から考えたい。徳島県環境基本条例や環境基本計画などでは、「人と自然とが共生する住みやすい徳島」という将来像が掲げられている。これをもう少し具体化して、一般の県民の方が共通認識を持てるような具体策を考えたい。

例えば、徳島の水環境はすばらしいのだが、その一方で、下水道整備が遅れていることがよく問題にとり上げられる。これを逆手にとって、徳島の特徴である都市の集積が小さいことに着目し、公共下水道ばかりを意識するのではなく、合併浄化槽の普及を先行又は優先する選択が環境と経済の両面から有効だと思う。

それから河川に関する環境学習などを考える際には、河川の特定の区間だけではなく、流域全体を捉えて考えないといけない。水環境や里地里山の保全などを流域全体として捉えていくことが大事だと考えている。

委員】

私の子どもの頃には、学校での教育以外に、地域における子供会活動があった。子供会は地域の人の指導により、いろいろな行事をこなしていた。ある地区では、生え放題になっていた雑草を抜いて掃除をしたり、また瓶や雑誌の回収をして得た運営資金で潮干狩りや海水浴など地域の行事に使ったりして

いた。最近は少なくなっているようだが、まだ徳島県には自治会が残っていると思う。ただ、住民の方の意識が低いことも事実で、公園の草抜きを呼びかけても、子どもがいないとか、公園はゲートボール場になっているのだから、ゲートボールをする人がすればいいと言う人もいる。

やはり30代、４０代の人たちの環境教育ができていない気がする。子どもと一緒になって、自分たちも勉強していくような機会をつくるのがいいという気がする。

部会長】

30代、４０代、５０代の人たちをいかに働きかけるかは、この審議会の目標の一つだろう。子どもと一緒に大人も勉強できればいいと思う。

委員】

地域の資源とか地域そのものを掘り起こす仕掛けや仕組みが必要だと思う。自分の住む地域のことを知らない人がたくさんいる。まずは地域そのものに愛着を持ち、知りはじめるきっかけづくりをする必要がある。その仕組みはこれから議論すればいいと思うが、まず自分の住んでいる地域に気づいて、地域そのものに誇りを取り戻すこと、さらには、生きてきていることそのものに誇りを取り戻すことが究極的な目標になると思う。

例えば総合学習の授業でも、外へ飛び出して、まず地域の中のどこに良いものと悪いものとがあるのか、歩きながら知るような仕組みが必要だろう。何か発見しようという思いを持って歩けば、良い悪いという価値判断ができるようになる。良いものは地域の資産として位置づけ、またそのプロセスを通して、それを守り続け、利用し活用し続ける仕組みを議論できるようにしたい。

一方で、悪いところというか、ここは駄目だと思うものも出てくるだろう。ドジョウやメダカがいなくなったとか、生活排水が臭いなどということについて、まず最初に何がなくなったのかを知り、次になくなったプロセスを理解する。問題を解決するためにはプロセスの理解が必要だ。プロセスについてみんなで検討し、なくなった、あるいは劣化した仕組みを理解することで、改善へのスターティングポイントを見つけられる。そういう仕組みをつくれば、継続的に前へ進む枠組みを作ることができると思う。

具体的な例としては、茨城県霞ヶ浦で進んでいる「アサザプロジェクト」がある。アサザという湖の畔の植物を取り戻すために、子どもたちが育ててそれを植えるのだが、里山からとってきた材で粗朶沈床を作って消波のために沈める活動に大人が積極的に参加している。子どもたちが水辺にアサザを植えることから始まって、流域の里山管理まで拡大し、それに企業も絡んでくる仕組みがができている。そういうのが一つの目標になると思う。

委員】

数年前に、徳島の宝物を探そうという趣旨のホームページがあった。地域の資産や資源の中で自分たちが徳島の宝物だと思うものを募集していた。私はたまたま取材を受けて、徳島の宝物は何かと聞かれたので、吉野川河口風景だと答えたことがある。その際に、例えば総合学習の時間に徳島の宝物というテ

ーマで取り組んでもらい、実践報告のコンテストをして賞を選び、発表会をして結果をまたホームページに載せてはどうかと提案したことがある。徳島の宝物というテーマで、ホームページという媒体を使っていろんな人がつながり、情報交換やネットワークができるのではないかと思った。

委員】

私の住んでいる地域では町内会の活動が盛んで、資源ごみを収集して町内会の活動費としている。そういう活動をより広げていく必要があると思う。

また、私は動物関係の仕事をしているが、神山町にある動物愛護センターで県から委託を受けて動物の教育、特に犬に関する教育をしている。そういう活動の中からある時、センターの職員が愛犬家による地域の清掃活動を思いついた。犬の排糞をそのまま放っておくことが問題となっていたので、愛犬家が集まって掃除をしようということになり、昨年１０月頃に新聞広告を出したら１００匹近くの犬と愛犬家が集まり、1日掃除をして、その時に犬の教育を一緒に行った。これは一例だが、町内会の事業にしても清掃にしても、それぞれの事業の中で様々なボランティア的な活動が掘り起こせるのではないか。

委員】

環境教育だけに関わらず、教育というのはただ知識を与えることだけが目的ではない。得た知識を生かした行動の変容ということが大切だ。公立の小中高において総合学習の中で環境問題、環境教育を取り上げている時間を調べてみたら、それほど多くなかった。学校での教育だけでは十分ではない。実際に家庭に入って実生活で生かせるかどうかが問題になると思う。

個人的な話になるが、私の住んでいる地域では、リサイクルやごみ問題にとても熱心に取り組んでいる。私には小学校5年生の男の子がいるが、実際に親が処理をするところを子どもに見せると、子どもも自然に、外に出てジュースを飲んだらリサイクルにまわすことを理解するし、車いすの購入資金となるプルトップだけ別に持ち帰ったりしている。小さい時からの教育は非常に大切だが、子育てをしている親の世代への普及啓発活動も必要だろう。

また、私が住んでいる地域には、非常に熱心なリーダー的存在の方がいて、その人が活動を引っ張っている。やはり組織づくりや、中心となるリーダーの養成が必要だ。さらには、１つの地区だけが一生懸命やって解決する問題ではないので、活動のネットワークづくりも非常に大切だと思う。

委員】

環境に関する活動をしている人や団体の情報を掲載したポスターやパンフレットのようなものを作成して町内会の子ども会や幼稚園、保育所に配布してはどうか。対象は保育所や幼稚園がいい。例えば全然関心のないお母さんや子どもたちに教えることを考えると、保育所や幼稚園など小さい時ほどいいと私は思う。保育所などにパンフレットがあれば、勉強する時にはこういうところへ問い合わせをするとお手伝いをしていただけるというような情報がわかる。まず活動を知ってもらうことが大事だと思う。

委員】

少子化が進んでいるので、子どもに教育する際に、親にも働きかけて教育していくのがよいと思う。自分の関係する分野で言うと、体験型農業の例がある。今、全国的に休耕田が多くなっているので、休耕田のオーナーを募り、お年寄りの方から学生を含め幼い子どもまで、地域の人の指導のもとでお米づくりや野菜づくりに携わり、同時に地域の自然に触れるという取り組みを見たことがある。

それから、徳島のいいところは、やはりちょっと足を運べば自然がたくさんあることだろう。その自然をどのように他の人に知ってもらうか、またどのように維持していくかを考えていくときに、いつも共通する課題がごみ問題だ。それはなぜか。ごみは、その場所をただ素通りしていくだけでは目に付かないが、仕事の関係でそこにいる人には目に付く。通勤途中にポイと放っていく人たちには通りすぎで分からないかもしれないが、それを目に付かせるというか、その人たちに分かってもらう手段を考えたい。ごみを拾うということからはじまるのかもしれない。一人ではできないこともたくさんあるので、地域ぐるみでまず一つのごみからなくしていくのも一つの手だと思う。足を運ぶことで地域の環境が分かるという相乗効果もある。

委員】

先程お話があった徳島の宝物探しのように、県民が徳島のどういうものを大切にしたいと思っているかを掘り起こすことは非常に大事だと思う。徳島県で一番大切にしたいものはどんなものかアンケートをとってみてもいいと思う。いろんな問題に取り組むのはいいが、多少整理が必要だろう。メインテーマをどの方面へ持っていくかがまず大事だと思う。

私はメインテーマの一つを水環境や水資源に置きたいと思っているが、最初はメインテーマをどのあたりに置くかということからスタートして、後は方法論として行政がどこまでできるか、どういうことをすべきか、また住民サイドでどういうことをするのかというふうに分けて考えていった方がいい。今は議論が錯綜して大きなところから細かいところまで出ているので少し整理をした方が理解しやすいと思う。

委員】

企業の環境教育はISO規格に基づいてシステム化してやっているが、ＰＤＣＡサイクルによる活動を行う前に、自分たちの作っているものにどんな環境付加があるかという問いかけをまず行う。その際に、環境意識のあるなしが非常に大きく影響する。何が環境付加になっているか考える時には、まず他社の事例というのが必要だ。それを伝えないと経験を３０年積んだ大人でも、環境に影響を与えていたという意識を持つまでに、やはり少し時間がかかる。ポイ捨ても同じで、ポイ捨てをすることは美化的にも悪いのだが、自然に体がやってしまうというようなことがあるのだろう。意識教育というのが大事で、それはある程度事例を示して行わないと難しいと思う。

委員】

小学校の現場のことをお話ししたい。総合的な学習は、年間でだいたい各学年１００時間前後、内容は国際理解教育、福祉、伝統文化など様々で小学校3年生から高校3年生まで行っている。その中で環境

教育も行っているが、全ての時間をあてているわけではない。私の学校で行っている項目としては、まず資源ごみの回収がある。ＰＴＡ活動とも関連づけて月に1回資源ごみ回収を行っている。また、地域へ出かけてごみを拾う活動も、婦人会などに声をかけて一緒に行っている。それから、本年度から（財）社会経済生産性本部・エネルギー環境教育情報センターの協力を得て、「省エネ」についての学習も進めている。2，3年前からはビオトープもつくっている。緑の少年隊に属して育樹祭の活動にも参加した。体験的な学習でネイチャーゲームを校庭で行う時間もとっている。新町川を船で回る活動もしている。

このように、子どもたちは３年生から６年生までの間に、いろいろなバラエティーに富んだ活動をしているのは確かだ。

子どもたちは、ごみにしても、ものの扱い方にしても、やはり親の姿を見て育っていると感じる。知識や体験は大切だ。地域の方々や親と一緒に活動することを通して、充実感や成就感、成功感、やって良かったなという気持ちができるような活動を、地域ごとに仕組んでいくことが大切だと私は感じている。think globally, act locally という言葉があるが、できることを身近なところから始めて、その体験活動を通して充実感や、やってよかったという気持ちを味わえる活動を少しずつ増やしていく仕組みが必要で、そこに行政の支援も必要だと感じている。

とりあげる主題は、やはり徳島であれば水、緑、ごみなどを中心に考えていけばよいと思う。

委員代理】

社会教育をどう位置づけるのかについて考えたい。最近は大人に働きかけても人が集まらず、出席者も固定化している。環境だけに限らないが、行政主導型は行き詰まっていると思う。地域の発想に行政がタイアップして取り組んでいる事例に、東京都千代田区のポイ捨て条例がある。千代田区の人口は４、５万人だが昼間の人口は100万人近い。地域の人ではなく勤務している人がタバコをポイと放ることに住民が困っていたところへ行政がタイアップして取り組んだのが、いわゆるポイ捨て条例だ。やはり地域の人に動いてもらうのがまず先だと思う。

公民館活動も趣味的な活動は非常に活発にやっているが、環境問題に人が集まるかどうか。リーダーを養成することも一つのポイントだろう。地域の掘り起こしも必要だ。都市部に行くと特に活動が少ない。山間部に入れば人は集まるが、環境保全のことで活発に活動しているわけではない。やはり意識改革には、実践と体験が一番いいと思う。

部会長】

それぞれに特色のある発言をしていただいたが、大きな方向としては、それほど違わないと思う。子どもと一緒に大人を巻き込んで環境教育を行うことがひとつ。子どもだけの教育では不十分だが、一方で大人だけに働きかけて教育をしようとしても人はなかなか集まらない。地域が非常に大事であることも皆さんの共通認識だと思う。「子ども」と「大人」と「地域」というのをキーワードにして、これから物事を考えていきたいと思う。

次に、徳島の環境が少しでも良くなるのに役立つ方針案をつくるためには、どういう分野を取り上れば

よいかということについて意見を伺いたい。以前、環境基本条例や徳島県環境基本計画をつくる際に、徳島としての地域特性とは何かという議論をした。その時に、それは「森と水と太陽」だということになった。森は緑と置き換えてもよい。徳島県の面積の７０％以上をしめる森林、まだまだたくさん残っている緑を大事にしないといけない。ＣＯ２削減にも役立つということもある。水については既にたくさんの方が言及している。徳島の水というのはやはり誇るべきものだし、何とか次の世代に引き継がなければいけないが、いろいろ問題があることも確かだ。太陽というのは暖かいという意味もあるし、日照時間が長いという意味もある。太陽エネルギーに的を絞った環境への取り組みというのも考えられる。雪国ではできないことだ。太陽光発電や風力発電も考えられる。太陽を使ってできることも徳島の地域特性として念頭に置いて議論していただければありがたい。

取りあげる分野について、まだ発言されていない方の意見を伺いたい。

委員】

由岐町や神山町で新エネルギービジョン策定委員会の委員長を務めているのだが、そこでは、農協や漁協の代表者、地域の婦人会の代表者などが委員となって、省エネルギーや新エネルギーについて議論をしている。私は、そこで議論すること自体が環境教育そのものだと感じている。委員の皆さんは、話を町内へ持ち帰って議論をしたり、学校はこんなところでこんなふうに使えるなどと考えたりしている。議論自体は環境教育とは別の施策として捉えられているのだが、そういう行動をもう少しエンパワーするような仕組みがあれば、環境教育につながっていくように思う。市町村レベルの委員会というのは、いろんな意味で題材を持ち帰って議論してもらえる。そういうところと環境政策を結びつける仕組みがほしい。それが大人に対する教育の一つの方法でもあると思う。

テーマに関しては、生き物という言葉を入れてほしい。森というのは抽象的なので、もう少し具体的な素材として生き物というのがあった方が、特に子どもを対象にした場合はわかりやすいと思う。

委員】

どうして方針を策定するのかという意義を考えてみたい。分野をどこにするかというのは、個人的にはどこでもいいと思っている。要するに環境意識を高めて、それにアクションが伴い、例えばごみがなくなったりＣＯ２が削減されて、地域が美しくなったり地球が良くなったりすることを目指しているのだと思う。ただ、こういう取り組みをする際に徳島らしさを出していくことで、そのインパクトが県下一円に広がり、一人ひとりの自発的な行動につながっていくと非常に好ましいと思う。もっと言えば、これが日本中に広がってＰＲになればいい。そうなれば徳島県民の励みになると思うので、そういうことを念頭に議論をしたい。

緑、水、太陽、それから生き物という言葉が出てきたが、子どもも大人も一緒に気軽に取り組めるという視点から考えると、ごみの減量化は、比較的取り組みやすいのではないか。実は12月 5日にとくしま環境県民会議の活動で徳島市内のゴミ拾いをした。こういう活動は誰にとっても取り組みやすい。例えテーマが水質になったとしても、水質とごみ問題は関連する。テーマを決めて実践する際に、取り組みやすさについても議論できれば、いいものができると思う。

部会長】

分野の選び方について、徳島の環境問題で大事な分野は何かという考え方が一つある。例えば尼崎市であれば主にディーゼルトラックから出てくる排気ガスによる呼吸器疾患が大問題なので、何とかしてディーゼルトラックの走行量を減らせないかと考えるだろう。しかしそれは徳島の重要ポイントではない。

それから、徳島でないと目に見えてよくならないものは何かという考え方もある。先ほどの意見にあった達成感というのは非常に大事だ。達成感があれば次につながるが、いっこうに良くならなければあきらめるだろう。達成感ということから言えば、ごみ問題がある意味では取り組みやすいし、達成感を出しやすいかもしれない。

例えば生き物でも、東京都の都心で生き物の話をしてもあまり意味がないかもしれないが、徳島ならイノシシやツキノワグマが出てくるという話があったりする。徳島でできるもの、徳島でやらなければならないものと、もう一つは達成感が出しやすいもの、みんなが参加しやすいものが、意味のある分野ではないかと思う。

委員】

二つの観点がある。一つは劣化したものをいかに良くするかという観点、もう一つは今あるものをいかにうまく使い続けるかという観点だ。ごみ問題は悪くなったものをいかに良くするかという観点だろう。一方で生き物は、きっとたくさんいて、どこにどれだけいるかも分からず、あまり注意も払われずに、いつの間にかいなくなっていることが問題となっている。いかに居続けられるようにするのかということをエンパワーするような施策がほしい。あるべきものとしてあり続けられるようにすることを意識化することが、環境教育の一つの目標として欲しいと思う。

前回の話にあったイノシシについて言えば、問題の本質はイノシシと人とに対立が生じていることだ。そこにまだイノシシがいること自体はすばらしいことかもしれないが増えすぎている。なぜ増えすぎているのかということに気づいていくところから、イノシシと人との対立を避けるためにどうすればいいのかという議論が始まる。来たから困るというのではなく、なぜ来るようになったのかを考えること自体が環境教育の目標であって、イノシシを排除することが環境教育の目標ではない。

また徳島は自然が豊かだと言われているが、本当なのかどうか。緑豊かな徳島と言うが人工林が60%というのは本当に緑豊かな自然なのかどうか。考えるきっかけとして、イノシシが出てきたということも環境教育の素材にできるし、クマが出てきたということも環境教育の素材にできる。背景にいかに注意を払えるようになるかということが大事だと思う。

委員】

テーマの絞り込みに関係ないかもしれないが、環境に関する取り組み自体が、時として本末転倒の結果をもたらす場合が少なからずあると感じている。環境への取り組みというのは、環境問題の本質的な部分から言えば、生態系というのが一つの大きなキーワードとなると思う。例えばごみ減量化に関して３Ｒ、４

R、場合によっては５Ｒという言葉を聞くが、それを前提にしたリサイクルが考えられているかどうか。あるいは環境アセスメントやミティゲーションが公共事業などでよく取り上げられるが、ミティゲーションにしても回避から始まって代償という手順を十分に理解した上で活動が行われているかどうか。なぜそれをしなければいけないのか、なぜそれが必要なのかということを十分に理解しないままでの活動はインセンティブを与えない。

委員】

今の発言は非常に大事だと思う。意識を高めて、まず考えてもらい、アクションを伴い、その結果としてＣＯ２削減やごみ減量化が進み、地域が美しくなる。そうなるために環境教育を行っている。３Ｒに関してもごみを減量化してよりよい社会をつくるということを達成するための一つの方法として３Ｒがあるのだが、それが目的となってしまうと見えなくなってしまう。注意しないといけない。

委員】

徳島の一番すばらしいのところは、やはり自然だと思う。私が気に入っているのは野鳥が町中に結構いることだ。町のいたるところに自然がある。ただ徳島市などでも以外と並木道がない。町の中に並木道があったり、自然の風景があるようにしておきたい。自然がすぐ身近にあるだけに、そういう努力をあまりしていないように思う。仙台市のように、並木道がシンボルとして町の中に欲しい。

水の問題が出たが、例えば新町川に鯉がいつも泳いでいるような風景が見られるというようなことになればいいと思う。子どもたちにもっと川から町を見てもらったら意外と汚いことが分かるかもしれない。

それから太陽について言えば、町のいたるところに太陽光発電のパネルが置いてあるような町になればいいと思う。新潟県中部地震でも阪神大震災でも電気が全部消えたときに、もしソーラーパネルがあり、地域の公民館が煌々としてれば、万が一の時に励みになると思う。

それから、例えば廃品回収やリサイクルで節約できた額や貯まったお金の額を計算してはどうか。県内の段ボールを集めて、これだけ節約になったとか、缶と瓶を集めてこれだけ節約になったというデータを出してみてはどうか。商業高校などにデータの計算をしてもらうようなプロジェクトを依頼してもよい。彼らが県や市からもらったデータを基に経済効果を計算してみるのもおもしろい。お金に換算することの是非は議論があると思うが、目標ができる。資源ごみとして出している段ボールなどがどうなっているかということは以外と知らないので、節約になったお金を計算すれば違ってくるのではないか。

委員】

先ほど話にあった森と水と太陽が全て含まれた環境が生態系そのものだと思う。なぜここの川にホタルがいなくなったのか、なぜこの土地に美しい鳥がくるのか、生態系にはそういうことが全て含まれている。どういう分野を取り上げるかと聞かれれば、それが一番必要なのではないかと思う。緑が少ないから木を植えようというのではなく、徳島の今の環境、生態系を守るためにはどうすればいいのかを一つひとつ考えて、そこから裾野を広げていければいいと思う。

委員】

徳島の人は阿波踊りに代表されるように、県民そのものが割とのりがいい。公務員の人でも県外の人と比べると柔軟だと思う。しかし、今は特定の団体が特定の人を呼んで活動をしている。先日も吉野川に関係する会をしていたが、参加者はわずか10人か15人。これが１００人、何百人となれば違ってくると思う。どの団体にもすばらしい人がたくさんいるのに、お互いを知らない。もし、お互いを知るようになったら、徳島はものすごくのってくると思う。そういう県民性だ。もう少しいろんな団体の活動をお互いに知り合うと徳島の環境問題は目に見えて良くなるはずだ。

部会長】

今日はこの程度で意見の交換を終えて、次回もう少し具体的な話をしたい。今日意見として出たごみ問題や生き物、水などの問題を取り上げることに反対の人はいないと思うので、次回は、そういう問題を環境教育として取り上げていくためにはどういうことが必要かという議論を始めたい。この分野なら、どういうことをしたらいいのかというような、もう少し具体的な話をしたいと思う。少なくとも水、生き物、ごみ、緑の問題は取り上げようという意見の方向だったと思うので、次回までに、それぞれの分野で皆さんの考えを少しまとめておいてほしい。次回は、２月の上旬から中旬くらいに開くことにしたい。

環境局長】（あいさつ）

以上